

free school
since 2004
in Osaka

フリースクールみなも

通信

第2号

[もくじ]

- ・ 活動報告(今川将征)...1
- ・ 経営レポート(今川将征)...2
- ・ 親の会報告(中村有美)...2
- ・ 座談会(構成・中村祥規)...3
- ・ コラム「自信の大切さ」(松浦豊)...6
- ・ じょに~の修士論文報告(中村有美)...7
- ・ お知らせ...8
- ・ 編集後記(中村祥規)...8

活動報告:みなもでは、こんな日常を過ごしています

ん~、前回の通信が一年前ですか...。そのころと比べたら...、大分フリースクールらしくなりましたねえ(笑)。なんせ一年前は子ども一人しかいませんでしたから。5月8日現在、体験入会中の子を含めると12人の子どもが入会しています。でもってまあ、この子たちがどんな活動をしているかですね。(今川将征)

日常生活

みなもが始まってから、どんなフリースクールになるのか模索しながらいろいろしてきたわけですが、基本的には「日常生活の延長」ってな場所になりつつありますね。感覚としては「友達の家に遊びに行く」というのに似ているんじゃないでしょうか。大体普段していることと言えば、ゲームをしたり、おしゃべりをしたり...といったことですが、ただそこにいるのが同学年の友達だけで

なく年の違う子どもであり、スタッフ・ボランティアら大人達である、といった場ですね。最近見学に来られた方は皆「普通の家みたい」と言っていますし...。なんせ入ったらリビングがあつてこたつでごろごろしてますからねえ(笑)。まあ、フリースクールにとって、不登校の子どもたちに「コミュニケーションの場」を提供するというのはいつの重要な役割かな、と思います。なにしろ、学校と家族以外で他人と関われる場というのが少ないですからね...



こたつを囲んで...みなもの日常風景です

イベント

日常生活に重点を置いている分、イベントは他のフリースクールよりやや少ないですかねえ。それが長所でもあり弱点でもある...かな? 良く言えば日常の流れを大切にしている、悪く言えば刺激が少ない。でも最近こっちもやっと立ち上がりつつありますね。代表的なものをいくつか。

・ アニメキャラ衣装作成

ミモフタもない言い方をすれば「コスプレ」なんですけどね...。「Bleach」というマンガの衣装や小物を自作して変装してます。裁縫の腕は結構上がりましたね。

・ 野球

近所のフリースクール「フォロ」「宙(そら)」とよく野球をするようになりました。「フォロ vs みなも宙連合軍」で戦ってることが多いです。

・ 麻雀サークル

この2、3月はかなりブームでした。毎週火曜日を麻雀の日にしています。あ、もちろん賭けはしてません(笑)

・ お泊まり会

これはどのフリースクールでも定番でしょう。最近では「女の子限定」「男の子限定」といった小規模のものもよく開かれます。



衣装は、ひとつひとつ手作りしました

学習

現在、月・水・金の 16:00~20:00 は「勉強もできる時間」にしています。希望者はこの時間に勉強もしています。当初は特に時間は区切ってなかったし、この時間以外にしてもいいんですが、やはりこういう目安がある方が子どもも勉強しやすいようです。それぞれの進度が違うので、今は個別指導の形式になっています。

経営レポート

さて、皆さんが一番気になるのはやはり「経営は大丈夫なん？」ってところでしょう。

1か月の主な収支

収入		支出	
月会費	150,000	消耗品	15,463
		家賃	90,000
		水道代	3,000
		電気代	9,080
		ガス代	2,431
		インターネット代	4,360
		電話代	5,045
		スタッフ交通費	25,777
<hr/>		<hr/>	
	150,000		155,156

(支出項目は05年7月~06年3月平均)

見ての通り、人件費を除く月々の支払いと、月会費収入がほぼ±0になりました。ので、とりあえず数ヶ月のうちにみなもがなくなる...ということはないのでご安心を。当面の今後の目標としては、常勤スタッフに給料を支払えるようになることですね。(今川将征)

大阪ならではの親の会(通称:まんま会)

親の会を担当して1年以上がたちました。親の会もフリースクールみなもとほぼ同じ時間を経てきています。そして、やっと2月の「保護者会」で「親の会」の名前が決まりました。「みなものまんま会」です。何故名前を新しくつける必要があったのでしょうか？今でも混乱している方は多いのではないのでしょうか。それは、みなもの中には「保護者会」「親の会」と似た会があるからです。

「保護者会」は会員の保護者に向けて行っている会です。みなもの運営や組織、スタッフ、ボランティア、経営状況など、みなもに関するあらゆることが議題にあげられる会です。一方「親の会」は会員であるかどうかは関係ありません。参加したいと思った方に参加していただけるように、内外に開かれた場になっています。

このような混乱した名前から脱却し、やっと通称「まんま会」が新しく生まれました。1年以上という活動の間、みかんさんを始め多くの方々に世話になり、そして勉強させていただきました。ここでは、勉強（発見）させていただいたことの1つを紹介させていただきます。

私自身は、3年前まで東海地区で不登校に関する活動を行い、そのころに数多くの親の会に参加してきました。もちろん、東海地区の親の会です。親の会の雰囲気は、土地柄が関係するのでしょうか。今でもまんま会とそこで出会った親の会との違いを感じるのです。その違いは、「活気」です。まんま会は、とてつもなくエネルギッシュに思います。泣いたり、笑ったり、怒ったりと喜怒哀楽が素直に表現される場だなと思います。ですが、東海地区の親の会は、やや大人しいように思います。いえ、もしかしたら「お上品」なのでしょう。誤解しないでいただきたいのですが、決してまんま会の出席者が上品でないわけではないのですよ。素直でエネルギッシュでユーモアにあふれているように思うのです。土地柄と書きましたが、まんま会は「大阪ならでは」の会のように思えてなりません。

不登校は、社会的に恥ずかしいことではありません。子どもの素直な表現の一つです。そんな子どもと親が共に生きるために、親は暗くなる必要もありませんし、こそこそ隠れる必要もないのではないのでしょうか。個性あふれる子どもの生き方を共に模索するためには、親が社会からの偏見をも時にははねつけて行く必要もあるでしょう。そのためのエネルギーが、まんま会にはあふれているように思います。

これからも皆さんと共に「また参加したい」「おもしろい」まんま会をつくっていきたいと思います。至らぬ点はあるかと思いますがこれからも宜しくお願いします。（中村有美）



お茶菓子をを用意して、お待ちしております

特集・座談会 「みなもってこんなところ」

「それで結局、フリースクールって何をしているの？」よく訊かれる質問であるにもかかわらず、私たちスタッフも、うまく言葉にできないことがよくあります。フリースクールみなもの魅力をもっと多くの人に知ってほしい！ そんな思いから、スタッフ・ボランティア計6人が、みなもについてよもやま語り合いました。みなもってどんなところなの？ そんな疑問に答え、そして、みなもの雰囲気の一部だけでもお伝えできれば幸いです。（構成・中村祥規）

【参加者】

大野：ボランティア。大学3年生。じょに～の大学での後輩

小崎：ボランティア。大学3年生

原：ボランティア。大卒後、教員を目指して大学に編入学。大学3年生

今助（今川将征）：みなも代表

じょに～（中村有美）：非常勤スタッフ

のりのり(中村祥規): 非常勤スタッフ。今回の座談会の企画者

座談会、始まり始まり～！

のりのり(以下、のり): まず、みなもでボランティアをしようと思ったきっかけについて訊きたいなって思ってるんやけど.....実際のところは、どんな感じだったの？

小崎: それ、最初から一番痛い質問なんですけど(汗) ホントに何となくで。ネットで検索したら、たまたまみなもが出て来て掲示板に書き込んでっていうのが最初で。すごいテキトーでした。

原: あたしは、教採(教員採用試験)の勉強してたときに、フリースクールっていう言葉にぶつかって、「これって何?」と思ったのが最初ですね。で、家の近くにあるフリースクールを探したら、こことほかにもう1か所が見つかって。両方にメールしたんですけど、みなもは、わりとすぐ返事が返って来てくれて、そのまま来ることに。

のり: 大野くんの場合は? 大野くんはネットとかじゃなくて、じよに~からこのことを聞いたんやろ?

大野: 僕もホンマに何となくですよ。子どもに興味があったのはあったんですけど、その頃は何を専門にするか全然決まなくて。いろいろ見て回ろうかなと思ってた時期に、たまたま、中村さん(じよに~)がフリースクールをテーマに研究しているというのを聞いて、秘書さんを通じて連絡を取ってもらって...という感じ。

「居場所というか、『家』って感じがする」(小崎)

のり: 初めて来たときの印象は、どうだった? みなもは、名前としては「フリースクール」を名乗ってるんやけど、やっぱり、「学校」というよりも「居場所」的な役割のほうが大きいかな?

小崎: そうですね.....居場所というか、「家」って

感じがする。マンションの一室やし。最初は私、「クツで上がる場所」というイメージを持ってたんですよ。勝手な想像なんですけど。椅子とか机とかがあって勉強する場所というイメージで。まさか、ゴロゴロ寝転がれる場所とは思ってなかった。

今助: 最近は、新しく来た人のほとんどが、それを言う(笑)

小崎: 最初は子どももいなかったし、ホント、誰かの家にお邪魔してる感じでしたね。



みんなで食事の図。確かに家みたいかも...

みなもを始めてわかったこと

のり: そうそう、で、奥の2部屋はほとんど使ってなかったのね。

じよに~(以下、じよ): まだ、正会員が1人しかいなかった時期やね。

のり: 去年の今ごろってどんな感じやったっけ?

じよ: あとは、よそのフリースクールから遊びに来てた子らはおったな。それが3人くらいか。その1人の正会員の子も毎日来るわけじゃないし、子どもが一人も来ない日も多かったよね。

のり: 原さんは最初、どんな印象持ちました?

原: う~ん。「フリー」という意味と「スクール」って意味を、来る前に自分なりに考えてたんですけど、どちらかと言うと「フリー」のほうが強いのかなという印象を持ちました。

小崎：あたし、何も知らずにここに来たから、こういうところが普通なんかなあ、と思ってたんですけど。

今助：同じフリースクールって名前を名乗ってても、本当にいろんなところがある。学習サポートを中心にしているところもあるし、宿泊型のところで「フリースクール」を名乗っているところもあるし。

のり：僕が最初に来たときも、いろいろプログラムがあるんやろうなとは思ってた。ホームページにも、講座リストとかあるし。

小崎：あたしもそれは思っていました。授業みたいなものもやってるのかなあと。

今助：現状では、個別指導になってるよね。やっぱり年齢がバラバラやから、みんなで作る授業は難しい。仮に年齢が同じだったとしても、進度がまるで違うしね。人数が増えたら変わるのかも知れんけど、現状は、個別指導の方がやりやすい。あと、始める前は気がつかなかったことやけど、勉強は塾でやって、みなもには息抜きで来る、っていう子が結構いる。そういう子に勉強が必要かと言えば、そうでもない。それやったら、息抜きの場所としての機能を持ってればいいわけで。みなもがもっと大きくなれば、塾の機能も兼ね備えた組織にするという考えもなくはないけど、それはしばらく先の話やね。

「みなもの場合、のほほんとしたところが長所になってるのかも」(今助)

のり：イベントとか企画については、どう？

大野：基本的には、自主性を重視してますよね。

今助：ちょっと前までは、全然やってなかったね。これでいいのかなと思うこともあったくらい。最近になって、ちょっと増えてきた。

じょ：子どもたちが言うようになってきたしね。

小崎：私はむしろ、日常生活派というか、ただただらしてるのが好きなんで。イベントのないところが、ある意味では、みなものいいところかもしれ

ない。この日は何があるからとかあくせくしないで、ぼーっとしてられる。ちょっとその気になったら、イベントの企画もしてみる、みたいなんびりしているペースが、私は好き。

原：あたしも、日常生活をここで過ごしてくれたらいいと思いますけど、その中で、6時のニュースと一緒に見ながら、気になったことについて大人に訊けるとか、ごみの出し方とか、家庭で教えるようなことを、ここでも出来たらもっといいかなと。

のり：何もしなくても居られる場所って、結構貴重かもね。イベントばかりやと、それに参加していないと取り残されるっていう感覚もあるやろし。

大野：それって大事やと思いますよ。ボランティアで中越地震の被災地に行ったとき、地震の半年後くらいの話なんですけど、最初のころは、どこも「援助せな、援助せな」で、毎日のようにイベントがあるんですよ。それで、被災者の人たちがイベントに疲れてしまって、もう「ゆっくりさせてくれ」と。そういう感じやったんで、僕らは、救援物資を取りに来た人にだけ配って、コーヒーを出すという形にして。そういうのが気に入ってもらえたりもしましたね。

今助：みなもの場合、のほほんとしたところが長所になってるのかもね。「普通の家みたいなどこですな」というのは、最近来た人には、しょっちゅう言われることやし。

「きょうだいが集まっているような雰囲気がある」(原)

原：家ということ言えば、きょうだいが集まっているような雰囲気もありますよね。うちの家の話をする、うちの親は共働きで、親があまり家にいなかったんですね。ただそれでも、きょうだい4人で、「お前は食器係、お前は布団係」みたいな分担が、ちっちゃいなりに出来上がっていて、ここでもそういうのが出来たらいいなと思います。

小崎：4人きょうだいでって珍しいですよ。
じょ：うん、せやね。
のり：ええと、ここにいるメンバーは、それぞれ何人きょうだいなの？
今助：僕が3人
のり：おれも3
小崎：あたし、2人です。
大野：2
じょ：あたしも2
のり：20代が6人いて、一人っ子ゼロって珍しいんじゃない？
小崎：そうですね。
のり：この子どもたちはどうなんやろ。ええと、一人っ子が、小2の男の子と中2の男の子、高1年齢の女の子と・・・
今助：中3と高1年齢の女の子2人はきょうだいいるけど、小5の男の子も一人っ子やなあ。男の子は、一人っ子ばかりやな。
のり：最近の子って一人っ子が多いわけやん、当たり前やけど。そういう子どもたちにとっては、歳の離れた子と接する場所という意味もあると思う。
原：そういう意味では、すごくいいとこやと思います。

(収録：06年3月5日)



みんなでやるゲームは、また楽しさが違います

コラム： 「自信の大切さ」(松浦豊)

子どもをもっと頼りにしよう

フリースクールの中に居て最近、「大事だなあ」と再認識することがいくつかあるんですが、その中で「提供され、提供する関係」と「付かず離れずの関係」について書いてみたいと思います。

「提供され、提供する関係」というのは例えば、食べ物、ゲーム、本、イラスト、知識、知恵、相談、調べ事、骨折り.....などを、あげたり貸したり提供したり、あるいはそうされたりすることを指すという事にさせてもらいたいんですが、これが大事だなあ、と。

特に「提供する」が恐ろしく重要で、これは大事な自尊心の糧になる。「提供できる」人間であると感じられることが、大人にとって以上に子どもにとっては必要なことなんじゃないかな、とさえ思ったりします。

識者の中の少なからぬ人たちがよく「子どもに甘くするからダメなんだ」というニュアンスのことを言っていますが、私は逆に「子どもにもっと頼るべきなんじゃないのか。子どもに頼らない(子どもに命令ばかりする)ような関係性にしておからダメじゃないのか」と思ったりもします。

付かず離れずの関係

それから「付かず離れずの関係」というのは、完全に密着とか完全に疎遠とか、あるいは人間関係が固定化されている.....ではなく、(多人数の関係の中で)すごく仲良くすることもあるけど離れたりもするし、また逆もあって、それらが流動的である、という様な関係の事だとさせていただきます。

これが大事だと思うのは、特に「完全に密着」と「人間関係が固定化」は、そもそも誰にとっても難しく緊張のある状態で、それよりいろいろな人といろいろな濃度で流動的に関係性を持っている方が健全で安定できるものであろう、という事にあります。

ところが思うに、最近の日本社会は「子ども時代」の環境について、この「提供され、提供する関係」と「付かず離れずの関係」を、(誰が悪いというわけでもないのだけでも)失ってしまっている様に感じます。というのは、子どもに頼るといことが極度に減り、それよりも子どもに命令ばかりしている。そして、関係性としては親・先生・同級生くらいとの関係しかなく、それらの人とうまくいかなくなると逃げ場がない.....。

フリースクールは、その失われた環境をある程度持つことができるものとなっている様に思いますが、日本社会全体においても、これらの条件を持つことが必要なのではないか.....そんな風に考えたりしています。(松浦豊)

じよに ~ の修士論文報告

修士論文、無事提出！

2006 年 1 月 17 日修士論文を無事提出することができました。タイトルは「新しいコミュニティとしてのフリースクールの役割」です。フリースクールにお子さんを通わせている保護者 5 名にインタビューをし、お子さんが不登校になる前からフリースクールに来るまでの親子の様子の変化をまとめました。

インタビューの内容をもとに、フリースクールへ来るまでの経緯を 4 つの段階に分けて整理しました。不登校になる前の段階、不登校初期の段階、不登校が深刻化していく段階、フリースクールに出会ってからの段階の 4 段階です。それらの変化から、フリースクールの役割、特に様々な人々(子ども・スタッフ・保護者のみならず様々な世代のボランティア)が交流する場の役割に注目しました。

コントロール不可能なこと

結論から先に言うと、「フリースクールは、わけのわからないものや事柄をそのままに受け入れる

場」ということです。日本は経済成長するにつれ、不可解な事柄を排除する癖がついてしまったように思います。特に大人にとっては、その癖がぬぐいようもないくらいに定着してしまっているように思えます。科学技術や医療の進歩によって、人の生死までもがコントロール可能なもののように思えてしまいます。そして、生きて働くということも、人からコントロールされるのが普通になってきたのではないのでしょうか。そういった生活環境の変化に伴い、大人はコントロール不可能な瞬間に立ち向かうことが困難になってきたということが、インタビューからわかります。

コントロール不可能なことを許容することが困難になってきた顕著な現象が不登校ではないのでしょうか。周囲の大人は寄ってたかって「子どもは学校へ行くものである」という言葉を親子に浴びせかけます。そこには、子どもは大人の言うことを聞かせるものである、という「わけのわからないものをコントロールする、管理しようとする姿勢」が見え隠れします。そして、コントロール不可能な存在は排除されていきます。第 3 期の不登校が深刻化していく段階では、保護者までもがよくわからない子どもを支えきれない状況にまで至ってしまいます。そして医学・心理学の専門家の多くは再度子どもを理解可能でコントロール可能な存在への転換を試みて様々な治療を施すこととなります。

フリースクールは専門家集団ではありません。色々な人々が集うということが最大の特徴です。生き方の統一されていない色々な人が集うことによって、色々なあり方を認めることができます。そして、特に保護者は、子どものよくわからない側面を絶望の淵で見守る必要がないことに気がきます。笑わなくなった子どもが笑い声を挙げて遊んでいる様子を本当にうれしそうに眺める保護者の姿が私にとっては印象的でした。フリースクールは、フリースクールに集う人々と共に、子どもの「よくわからない」側面から「可能性」を見出し、喜びに変えていく役割を果たしているのでは

ないでしょうか。

みんなに感謝

修士論文を無事提出することができたのも、フリースクールみなものスタッフからの暖かいはげましと研究への理解、そして、フリースペース宙（現、デモクラティックスクール宙）に協力していただいたおかげです。そして何よりも苦しい経験を語ってくださったお母さん方のおかげです。ご報告と共に、皆様のご協力と多くの励ましのお言葉に感謝申し上げます。

お知らせ

みなものまんま会（親の会）

フリースクールみなもでは、毎月第3土曜日に「みなものまんま会」（親の会）を開いています。まんま会は、不登校のお子さんを持つ保護者の皆さんに、お互いの気持ちを共有し合える場を提供することを目指した会で、みなもの会員であるかどうかにかかわらず、どなたにでも参加していただけます。参加をご希望の方は、ぜひお気軽にお問い合わせ下さい。

【概要】日時：毎月第3土曜日の13:30～16:30、場所：フリースクールみなも、参加費：300円（お茶菓子代として）、アドバイザー：中尾安代さん（みかんさん＝結空間代表）、担当スタッフ：中村有美

ボランティア・賛助会員募集！

フリースクールみなもでは、さまざまな形で活動を支援して下さるボランティア・賛助会員を募集しています。子どもたちとの活動を一緒に盛り上げていくボランティアに興味をお持ちの方は、お気軽にみなもまでお問い合わせください。

また、経済面でみなもの活動を支援していただける方には、賛助会員への応募をお願いいたします。賛助会費は、1口3000円/年です。

編集後記

というわけで、ようやく、みなも通信第2号を皆さんのお手元にお届けすることができました。いいかげんに通信を出そうと言いだめたのが今年の1月で、おおかたの原稿が集まったのが3月の20日ごろ。すぐに編集作業に取り掛かれればいいものを、さらに延び延びになってしまって、結局こんな季節になってしまいました。

記事を書く途中でも、実はけっこうドタバタがあって、僕が担当した座談会では、参加メンバーの大野さんに、集合時間を間違えて伝えるという大ボーンヘッド。記事では何とかごまかしてみたつもりですが、大野さんは結局、1時間遅れの参加になってしまいました。大野くん、あのときはホントーにごめん m(_ _)m。

それでも、1年4か月ぶりに発行する通信とあって、内容的にはなかなか読み応えのある記事をお届けできるのではないかと、ちょっとだけ自負しています。今後の目標はやっぱり、定期的な発行ですよ（冷や汗たらーり）。今回の作業で、ちょっとだけ勝手に分かってきたので、今後の課題にしたいと思います。

なお、お読みになった感想などがございましたら、お気軽にみなもまでお寄せくだされば幸いです。それでは、今後ともフリースクールみなもをよろしく願いいたします。（中村祥規）

『フリースクールみなも通信』第2号

発行日：2006年5月15日（本号8頁）

編集人：中村祥規

発行者：特定非営利活動法人・フリースクールみなも（理事長・今川将征、2005年6月15日認証＝大阪府指令府活第2-58号）

住所：〒530-0047 大阪市北区西天満5丁目11番地4号 ふじビル502号

電話・FAX：06(6365)7705